



# 帯広

## マンモスもやってきた大地

巖谷 國士 *Iwaya Kunio*

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリズムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリズムとは何か』ほか多数、近著に『溢澤龍彦論コレクション』全5巻。昨年初夏にはまた道東の旅をした。

昨年の初夏、めずらしく台風が北海道を通過しつつあったため、道東も雨天で、帯広駅に着いたときにはかなり降っていたが、これまでの晴れわたる青空のイメージとは違う十勝を経験できるのはむしろ幸運だろうと思うことにして、ホテルに荷を置き、タクシーを拾って、緑が丘公園の北東の入口で降りると、運転手氏はステッキをついた物好きな老人の先ゆきを思いやってくれたものか、「広いからね、雨がひどいし、気をつけてくださいよ～」といった。

200箇所はあるという帯広の公園のなかでもここは代表的なところで、面積50ヘクタール、なるほど広くて奥ぶかいし、雨も土砂降りになっていたが、さいわい風はないのでどんどん歩く。まず右手にあらわれた帯広最古とされる建造物、かわいい赤煉瓦造の「十勝監獄石油庫」(1900／明治33年)を見てから、そのまま直進すると、しだいに森らしくなってくる。右にひらけた白樺並木のある道に入るころには、下半身ずぶ濡れの有様だった。

だが雨にけむる白樺林も美しい。当然ながら誰もいない。左折してしばらく行くと寂しい池に出た。「十勝池」といって十勝の形をしているらしい。雨でも扇

状に吹きあげる噴水を眺めながら進むと、まもなく「帯広百年記念館」に着いた。

館内は1階だけでさほど広くないが、空調もよいし、館員の女性たちも親切だし、見学者はどうやら私ひとりしかいないので、濡れて冷えた心身もいわば十勝モードに戻り、ゆっくり展示を見てまわることができた。

### 百年、2万年、46億年

まず目に入ったのは巨大なマンモスの複製である。それも雪解けの大地から上半身だけ伸びあがり、大鼻と大牙を天井に向け、大口をあけて叫んでいるかのようなマンモスだ。こんなポーズをとる複製はあまり見たことがない。

近づいてみると一種のジオラマだった。背景に「2万年前の初夏の十勝平野の景観」をくりひろげ、「マ



マンモスの複製と、2万年前の十勝平野のジオラマ。  
帯広百年記念館。撮影：筆者

ンモスが増水した湿地に落ちた様子」を再現している。おもしろい。こんなドラマの演出は帯広ならではかもしれない。

2万年前、氷河時代の北海道はサハリン（樺太）とつながってシベリアから突きでていた半島で、他の北方動物と同様、マンモスも南下し、十勝平野を闊歩していたのだ。帯広というその中心地の広い公園のなかにいると、そんな事実も想像しやすい。子どもでなくともわくわくするような展示である。

「百年記念館」というのは1883／明治16年、開拓団・晩成社によってこの地に鍬がおろされてからの百年を記念するもので、1982／昭和57年に開設された。だが十勝の歴史を百年さかのぼるというだけではなく、2万年前の自然光景をジオラマで見せているのがいい。それどころか、「十勝の自然」コーナーから「十勝の先史時代」室へと移るあたりの壁には、なんと46億年前の「地球の誕生」以来の、いわば地球史の図表まで示されているのだった。

地球の全史を仮に1年間に置きかえ、誕生が元旦の0時だったとすると、最初の生命の出現した10億年ほど前の時期は、3月下旬にあたるだろう。海中で進化した生物は11月下旬から陸上にあがり、12月13日には恐竜が猛威をふるうにいたったが、25日には絶滅してしまう。押しつまつた12月30日夕刻、十勝の西側の日高山脈ができる。ようやく地球上に人類が登場するのは12月31日、つまり大晦日の17時すぎない。

北海道で縄文時代がはじまったのが夜中の23時59分、現在の帯広に開拓団が入ったころにはもう23時59分59秒をすぎていたというのだから、地球とはじつに長命なものである。

デスマスチルスとホタテの海



そんな悠久の時間を想像力に注入しておいてから、「十勝のおいたち」「十勝の先史時代」「十勝のアイヌ文化」、さらに第1展示室の「開拓の夜明け」「十勝農業王国の確立」へと移ってゆく展示はわかりやすく、やや小規模ながら充実感がある。こういうセンスはやはり北海道、いや十勝ならではというべきだろう。

たとえば1千万年前まで北太平洋沿岸にのみ棲息した巨大哺乳類・デスマスチルスの想像図とか、十勝に多いカシワの大木のそびえる乾性林のジオラマとか。旧石器時代から縄文、続縄文、擦文を経てアイヌへと変遷する文化の資料展示も興味ぶかく、十勝の風土に合う豆類と小麦、馬鈴薯、ビートの4連作による「農業王国」確立の経緯や、さらに畜産と酪農のめざましい発展、馬という家畜の重要性についても、いろいろ理解が深まるように思われた。

それからまた雨のなかを歩き、公園内の野草園や児童会館などにも立ち寄ったのだが、さすがに疲れてヨレヨレ・びしおびしおになり、最後の道立美術館ではタクシーを呼んでもらう羽目になった。

それでも百年記念館で長居できたのは幸運だろう。すでに何度か旅しているにしても、十勝という地方、帯広という都市のことを、長い地球の時間のなかで見なおすことができたからである。

### 十勝と帯広の広さについて

実際に北海道のなかでも、十勝という地方には独特のところがある。南は太平洋だが内陸に広大な平野がひろがり、大半は大陸性気候で、湿度が低く雨雪が少なく、冬は寒く夏は昼だけ暑い。まさに日本と思えない、北欧かカナダのような風土である。

面積は北海道の総合振興局のうち最大で、日本の都府県中第6位の岐阜県に匹敵する。他方、人口は35万ほどで、岐阜県（都府県中第16位）の6分の1にすぎず、しかもその半分の17万は帯広に住んでいる。

帯広はこの地方唯一の「市」で、都といってよいほどの中心地だが、人口はさほど密集していない。面積

1500万～1000万年前（諸説あり）、北太平洋沿岸部に棲息していた体長3メートルにもおよぶ「謎の」水生哺乳動物、デスマスチルスの想像図。足寄や幌別などで化石が出土している。帯広百年記念館。  
撮影：筆者



国立大学法人帯広畜産大学。雨のなか、正門奥に見える「総合研究棟Ⅰ号館」。  
撮影：筆者

地面積は190ヘクタールもあり、じつに東京大学本郷キャンパスの5倍に近いのだ。

M先生は車でこの大学に沿って走り、正門から構内を覗かせてくださったのだが、そのときかわした言葉もまた忘れがたい。

「キャンパスが広いですからねえ。教職員も構内の宿舎に住んでいて、馬で校舎に通う人もいるようですよ。」

「馬で！馬がそんなにいるんでしょうか？」

「馬は学生よりもたくさんいるようですよ。」

「……。」

これで興味を惹かれない人は稀だろう。M先生の車では中に入れなかったが、40数年後、あらためて構内を歩いてみなければなるまい。「広さ」と「馬」を実感するためにも。

翌日も雨だったが、私はまたタクシーを拾い、帯広畜産大学の正門前に降り立った。

### 畜産大学ふたたび

正門から入ると、カシワらしい並木のつづく直線道の奥に、「総合研究棟Ⅰ号館」が望まれる。3階建て左右対称の建物で、中央上部に四角い時計塔があり、入口には3連のアーチ。とくに特徴のない国立大学らしい建築だが、並木道は長いので、雨のなかでのアプローチはやめた。馬の姿はない。

並木道の途中左に「本部棟」が立ち、向いに「かしわプラザ」という建物の門がある。生協（食堂・売店）の看板も出ているので、入ってみることにする。タクシーの運転手氏も買物のために生協へ。

生協売店はやや期待はずれだった。普通の日用品のほか、本屋には畜大や帯広や十勝の本ならぬ巷のベストセラーが並んでいるし、オリジナルグッズ売場にも特別のものは少ない。大学名入りのタオルやトートバッグや、Tシャツもいろいろあるのだが、北見・常呂の「そだねー」Tシャツのほうが主役の扱いだった。

食料・飲料が多いのは特色ともいえそうで、畜大

が広く、東京23区に匹敵する。ところが人口はなんと、その55分の1にすぎないので。

帯広の語源はアイヌ語のオペレペレケブ（川尻が幾重にも裂けたところの意で、十勝川水系の分流のさまをいう）の「オペレ」に、平野の広大さをあらわす「広」を加えたとされる。字面からしても平らで広そうな地名だ。それが長い困難な開拓と農耕・畜産の試行を経て、いまではひとつの「農業王国」の首都ともいえる町に育ってきた過程を、私はホテルの部屋で復習した。

帯広にはじめて来たときのことが思いうかぶ。50年近く前の夏、北海道周遊の途中にここで降りて、遠戚にあたる医師Mさんのお宅でご馳走になり、泊めていただいた。十勝川の鮭と十勝平野の馬鈴薯の入った十勝鍋の味はいまも忘れない。しかもM先生は翌日に車を出し、町をひとめぐりしてくださったものだ。

そのときの帯広の印象もまず「広さ」だった。世界でここだけの「ばんえい競馬」も見たはずだが、それ以上に記憶に残っているのはこの都市で唯一の大学、しかも国立の、帯広畜産大学である。

「畜産大学」と呼ばれる施設自体が国内でここしかない。畜産は「家畜を飼って人類の生活に利用する産業」（岩波国語辞典）を意味するが、英語名では《University of Agriculture and Veterinary Medecine》なので、獣医学分野もあることがわかる。創立1949／昭和24年。現学生数は約1,400人。だが敷

クッキーや畜大牛乳や畜大チーズ、さらに「畜産大学」銘柄のワインも気になったが、醸造所名は学外になっている。こうした物産も試作されているとしても、販売はしないのだろうか。その点をレジの女性に尋ねると、「畜大さんの事情はわかりません」とのこと、大学を「さん」づけで呼ぶところなど、生協自体が学外組織だということだろう。

結局ほかの多くの大学生協と似たような感じで、畜産大学という名称にまつわる一種のロマンティズムは崩れはじめた。少なくともいまは馬を見かけないし、馬関係の商品もない。他大学とともに変わらぬ現代モードの、おとなしい学生たちの集う、偏差値の高い国立大学の一例なのかもしれない。

運転手氏を誘って食堂へ行くと、さすがに肉料理が豊富で、しかも安いから、近所の人も食べにくるという。雨のせいか数は少ないが、都会風ファッショングループがいて、楽しげに昼食をとっていた。

カウンターで名物は何かと聞くと、「牛とろ丼」だという。生肉に近い細切れをのせたこの丼を味わいながら、運転手氏とすこし話す。校舎に馬で通うという噂は聞いたことがないらしい。40数年前の作り話ではないのか、と。ここもまた現代の、通常の立派な大学だと考えるべきではないのか、と。

それでもじつに広い。そして雨天なのに乾いて明るい。この空間も帯広の一部であることには変わりがないのだった。

### 古い建物、お菓子と庭園

あとは運転手氏の提案を容れて、古い建物を見てまわる雨中ドライヴとなった。1920年造のハイカラなビート記念館。メルヘン風の双葉幼稚園。昭和モダンの十勝信用組合本店。<sup>つた</sup>鳶のからむ西洋館の銭湯・櫻湯。戦後を懐かしむ理容店セイノ。「菅公」や「金鳥」の看板の残る「いなり小路」入口。堂々たる煉瓦造の宮本商店。どれをとっても戦前から戦後にかけて建てられ、各時期の帯広の記憶をとどめている建物である。

なかざつない  
帯広市の南に隣接する中札内村にある「六花の森」庭園、「花柄包装紙館」の窓からカシワなどの森を望む。

撮影：筆者

ようやく雨がやんだので、歩道になぜかエゾシカ像の立っているあたりで降りた。その奥に私設美術館めいた前庭が見えるので、入ってみると有名な菓子舗・六花亭の本店である。和・洋の菓子もまた十勝・帯広の特産であることを思う。小豆や小麦や乳製品や砂糖の産地だから当然のことだ。

ついでに「六花の森」が思いだされる。2年前に某誌の取材で十勝の庭園5箇所をめぐり、帯広市内にある2大名園「紫竹ガーデン」「真鍋庭園」のことも書いたのだが、紙幅の関係で「六花の森」は外すことになった。だが帯広にごく近い中札内に位置し、十勝らしい自然を保存している庭園なので、この機会にひとことだけ触れておこう。

帯広・十勝には大きな公園（パーク）ばかりでなく、公開されている私設の庭園（ガーデン）も多い。広大で乾燥した土地だから、西洋式の大庭園も営める。六花亭の開設したこのガーデンも西洋式で、十勝の森や川を生かし、土地に合った草花を自然に咲かせ、散策を楽しめるようにした庭園だけれど、とくに画家たちの展示小屋を点在させているところがユニークだ。

なかでも大規模なのが「坂本直行記念館」で、遠くクロアチアから移築してきた木造建築がすばらしい。坂本龍馬の遠戚というこの山岳風景画家は、六花亭のために十勝の6種の花をあしらう包装紙を描いたことでも有名で、別に「花柄包装紙館」もできている。

壁いちめんに画中の六花を散りばめたメルヘン調のギャラリーだが、じつは窓がいい。壁紙の花々にかこまれたフランス窓から外の景色が見える。白木の窓枠が額縁になって、カシワなどの森が美しく浮かびあがった瞬間に、私は「十勝！」を感じたものだった。

